

【 会員投稿 】

上州を彩った文人たち (その3)

ひまじん

第二芸術論という用語がある。これは戦後まもなく、フランス文学者桑原武夫教授が主張したもので、日本古来の俳句は思想性・社会性の自覚がなく、現代の人生を表しえないものであり「第二芸術」として、他の芸術と区分し、学校教育からも締め出すべきという、主張であった。俳句界からも有効な反撃がなく、現在でも公知されているかのようである。なぜ今、こんなことを書くかという、小生は長いこと、このやや蔑視的な「第二芸術」のなかに短歌も含まれているものだと、勝手に思い込んでいたのであるが、改めて検索してみたら、短歌は「第二芸術」の範疇に入っていなかった。今回紹介するのは苦手な歌人である。

吉野 秀雄 と 山口 瞳

両者は先生と弟子であった。二人が出会ったのは昭和21年4月 吉野44歳、山口19歳のとき、鎌倉に「鎌倉アカデミア」という大学校ができて、瞳君がそこへ入学したのである。

吉野秀雄は明治35年 高崎市呉服商吉野商店の次男として生れた。(吉野商店は後に榊吉野藤となり、現在でもアパレル業界では知られた存在らしい。) 地元高商卒業後慶応に入学するが、23歳のとき、肺患にかかり帰郷、大学も中退する。そして、この病いが生涯の持病となってしまうのだが、この頃より、国文学の独習に励み、作歌を始める。「鎌倉アカデミア」の教師になるころには、会津八一との親炙、古歌の研究、作歌等により、短歌界での地位を固めていた。

瞳が教わったのは「万葉集」と「作歌の指導」であった。学校における吉野を山口は「先生の全体の印象はますらおである。大きな人である。容貌魁偉であるが、それが同時に優しいのである。先生は誰からも愛されるようになった。」と書いている。

山口瞳は群馬とは無縁なのだが、OB各位には「トリスを飲んでハワイへ行こう!」の作者だといえば、思い出してもらえるかもしれない。古すぎるよというなかれ! 彼は寿屋宣伝部で活躍後『江分利満氏の優雅な生活』で直木賞を受賞、『居酒屋兆治』は高倉健主演で映画化された。「週刊新潮」に『男性自身』というタイトルの小説風随想を31年間連載するという流行作家になる。



『この人生に乾杯!』の表紙

彼の死後(平成7年)『この人生に乾杯!』が刊行されるが、その副題にあるごとく、30人の各界著名人が思い出を書いている。その分野は映画・競馬・野球・将棋・等々数多く、それに自身の著『私の行きつけの店』はもとより飲んべいの話である。当時の五時から男たちにモテタわけである。

話を吉野の方に戻そう。彼が「鎌倉アカデミア」の教師になる前 昭和19年に四人の子を残し、妻に死なれる。この前後の状況を読んだ『寒蟬集』が草稿のうちに認められ、出版される。

しかしながら、「鎌倉アカデミア」は正規の認可を得てない大学であったためか、教授が去り、生徒が消え、25年には廃校になってしまう。

以後、定収入は皆無となり、原稿料、選歌代金、講演料等での生活が始まると年譜にある。小説家と違い少し名が知れても歌人の生活は容易ではないものらしい。

随筆『わが心の日記』を引用してその生活振りを窺ってみよう。「歌はなんのために作るか。好きでおのづから作るというふほかに毫末のりくつもあらずはない。・・・

下手も上手もへちまもなく、それなくして当時の孤独に堪えることは不可能であった。のんきな手ずさび、結構な趣味とはまったく別なのであった。」

貧しさと病弱と闘いながら、「良寛」「子規」「会津八一」の研究を重ね、58歳の時に『吉野秀雄歌集』で読売文学賞を受賞する。

第1回釈迦空賞を得たのは昭和42年66歳死の直前であった。群馬県の山河を多くの歌に残したが、鎌倉を離れることはなかった。

今でも秀雄を偲ぶ『艸心忌』(そうしんき)が墓所のある鎌倉で毎年行われている。



彼の代表歌を掲げるかわりに(選歌に自信がないので)山口瞳が書いた佳作『小説 吉野秀雄先生』を挙げておこう。一読をお奨めする。

会員投稿の協力を有難うございます。現在の未掲載原稿は、七件です。引き続きよろしくお願ひします。

● 今月の【 細野水彩画廊 】: 『 城砦の町 』

<http://www18.ocn.ne.jp/~hishimig/hosono2012-11.pdf>

● 【 須永写真ギャラリー 】: 『 晩秋の観音沼 』

<http://www18.ocn.ne.jp/~hishimig/sunaga2012-11.pdf>